

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	浜松市立細江中学校	氏名	矢部 航一郎
-----	-----------	----	--------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

「国際協力の現場を見てきたい」「青年海外協力隊の方々の活動を生で知りたい」というのがこの始まりだった。

訪問地に訪れる度に相手国のことをきちんと考えた日本の支援がそこにはあった。多方面にかかわる支援を具体的に肌で感じてくることができたのはとても大きな学びだった。これらをきちんと子どもたちに伝えていきたいし、授業実践の最初と最後に子どもたちに「国際協力って何だろう？」と問いたい。国際協力の大切さを感じ、決して価値の押し付けではなく、様々な情報を伝えた上で、各自考えてほしいと思う。

加えて、様々な分野で国際協力されている協力隊などの方々の活躍を知ることができたのは大きい。バレーボール指導で国際協力されている本間さんは、特に新鮮だった。そうした誰にもある得意分野や長所、専門性を生かして世界で活躍し感謝されている方がいることを紹介し、子どもたちの生き方や夢を考える一助になったらそんなにうれしいことはない。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

ラオスのことは正直なにも知らずに今回の研修に参加したが、そんな不安をすぐに吹き飛ばしてくれたのがラオス人の笑顔だ。みんなにこやかに「サバイディー」と手を合わせながら挨拶をしてくれる。優しさを感じる。挨拶の大切さを改めて感じた。シャイな人も多かったのだが、子どもも大人も聞いたことにはみんな笑顔で答えてくれる。時間とともにほぐれていき、もっと話してみたいと思う人ばかりであった。人が温かかった。

そして、雄大な自然、いくつもの歴史的建造物、伝統文化の豊富さに驚かされた。私は車に乗ればずっと車窓からの眺めを楽しんでいたし、降りればシャッターばかりを切っていた。「ラオスのことが好きですか？」と聞いたら、ニコっと笑いながら「はい」と答えてくれた人がいた。この先目覚ましい経済発展を遂げていくと思うが、このきれいな景色、環境、文化、笑顔を大切に守りながら発展していったらと願う。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

この研修期間中、度々「ラオス人は日本人と似ている」と感じたし、聞きもした。また、「日本も同じだ」という話をいくつも聞いた。思えばラオスを見ながら自国のことを考える機会をたくさんいただいた。

出会ったラオス人はみんな誠実で、優しかった。何かされると「コープ・チャイ(ありがとう)」と必ず言う。微笑みながらもどこか奥ゆかしい方もいた。争いを好まない人が多いと聞く。日本人の気質に似ていると感じた。

ラオスの抱えるごみ処理問題は、昔の日本も同じであったと説明を聞いた。ラオスには不発弾処理の問題が

あるが、日本にも沖縄をはじめ不発弾問題があると考えさせられた。ラオスの病院や環境教育支援を見学しながら、日本も医療の充実や子どもへの環境教育の大切さは同じだなと感じた。露店を営みながらケータイを触り続ける青年、これも日本と同じ問題か？

ラオスという国をいっぱい知りながらも、実は日本のことをたくさん考えた気がする。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

数々の問題を考えさせられたが、その中の1つ、不発弾処理問題は非常に興味深かった。ラオスにはクラスター爆弾などの不発弾がいまだに多く地中にあり、人々の生活を脅かしている。時折不発弾の発見・処理がニュースで報道されるように、普段安全と信じている日本でも実は同じ問題を抱えている。私はこれまでこのように意識していなかった。その日本もかつて海外で戦争をした。つまりは、日本は被害者でもあり、加害者でもあるわけだ。昔日本に爆弾を投下したアメリカは、諸外国で不発弾処理支援を行っているそうだ。そして今現在、日本もラオスで不発弾処理の手伝いをしている。

これは、世界中の人々が安心して暮らせるために絶対に解決していかななくてはならない問題だ。これを罪滅ぼしというのかは分からないが、過去を乗り越えていく必要を感じる。子どもたちとも一緒に考えてみたい問題だと感じた。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

「持続可能な開発の支援」「相手の立場に立った支援」というものを、一貫してきちんと行われているところに感銘を受けた。相手国のニーズを受け、相手の実情に沿った支援をしている。さらに、最終的に支援が終わっても相手国だけで運営・管理できるところ（ゴール）までをきちんと考えられて支援をしている。それ故に相手国の人々に感謝されていることを、肌で感じる事ができた。日本人のもつ緻密さと思いやりを感じた。

さらに、青年海外協力隊の方々の笑顔が素敵すぎることだ。皆さん、本当にやる気と生きがいをもって活動に従事されている。自分たちも現場で見聞きしたことを子どもたちに伝えていくが、報道等でもっと積極的に紹介され、世界各地で活躍している日本人がいることを知る機会があってもいいと思う。加えて、青年海外協力隊の従事期間を終えた方々のその後の活動や生き様などにクローズアップして広報・紹介する場面があってもいいと思う。様々な分野で活躍されている方々ばかりだと感じる。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

⑤ ラオスパイロットプログラム環境コンポーネント LPPE

JICA 専門家の志村さんと稲森さんより前半はLPPEについての事業説明をいただき、後半はごみ処理施設などを見学させていただいた。ラオス政府と JICA、ASEAN 事務局の三者が協力して3つのコンポーネントを実施しており、環境コンポーネント（LPPE）はそのうちの1つの事業である。百聞は一見に如かずというが、ここで「持続可能な国際支援」のあり方についてすごく勉強させていただいた。

私は、国際支援というとまず高価な物やお金をイメージしてしまっていたが、ここの支援の形は違っていた。

環境にも配慮しつつも採算が合い運営できるごみ処理の形を考え、ノウハウを伝え、最終的には支援が終了しても現地の人だけで運営・管理できる形づくりを目指している。ただ物を与えるのではなく、相手のことを本当に考えて支援している日本を誇らしく思えた。そして、このような支援の形をコーディネートされながらも「お金の支援も大事」と語る志村さんの言葉の意味が重く感じられた。(矢部航一郎)

⑨ サヤブリー県病院／青年海外協力隊（看護師）活動

副院長に病院の概要を説明いただいた後、青年海外協力隊の福嶋さんに院内を紹介してもらった。県立病院とは言っても、日本とは全然違っていった。外からでは分からない、現場にいて初めて分かる必要な支援があると感じた。相手を知り、相手の立場に立って行う支援の大切さを感じた。

「改善できる場所を見つけ提案するのが役割」と話す福嶋さんは、男女の入院部屋を分けたとかベッドをもっときれいにしたいとか、日々の業務で感じるまをいろいろ教えてくれた。福嶋さんは中学の授業で青年海外協力隊のことを知り、以来ずっと夢見て今それを実現されていると熱く語ってくれた。夢をもつことの大切さを改めて感じるとともに、教師として、今接する子どもたちの夢の支援を頑張らなくてはと教わったようだった。

また、多くの患者さんが家族に付き添われ、見舞われていた。家族をととても大切にしているラオス人の情を見ることもできた。(矢部航一郎)

⑩ 青年海外協力隊（環境教育）活動（処分場、子どもセンターでの環境教育など）

子どもたちと一緒にサヤブリー県のごみ処分場を見学し、青年海外協力隊の田口さんがコーディネートする環境教育の授業に参加させていただいた。子どもセンターの施設見学も行った。

授業では、木の板や瓶、ビニール袋などの身近なごみの写真カードを子どもたちがグループごとに相談して自然に還りやすい順に並べるといったものであった。子どもたちは相談しながら楽しそうであった。幼いころからごみについての正しい知識を身につけることの大切さは、日本もラオスも同じである。即効性のある支援も大切だろうが、ラオスの未来を担う子どもたちに対する正しい教育を施すことの大切さをこの見学で学んだ。

加えて印象深いのは、協力隊の田口さんの笑顔。子どもたちにやさしく語りかける田口さんは本当に楽しそうで、やりがいに満ちた顔だった。苦勞も多いと語ってくれたが、一生懸命活動されている様子に感心させられた。(矢部航一郎)

⑪ JICAラオス事務所報告会

クア・ラオというレストランで、JICAラオス事務所のスタッフの皆さんと食事をつとめた。日本をはじめとした政府の要人も訪れるレストランのようで、店内はかなり賑わっていた。食事中には、ラオスの音楽演奏や民族衣装に身を包んだ踊り子さんの舞踊を楽しむこともできた。

帰国を翌日に控えたこの日の食事。私は木村次長に「ラオスはどうでしたか？」と聞かれ、これまでの旅で見聞きしたこと、感じたことをありのままに話した。また、次長ご自身の海外赴任経験などを聞かせていただいた。特に次長のお話する中で印象に残ったことは、ちょうど私たちと同じ時期にラオスに研修に来ていると

いう沖縄の高校生たちのことについて。研修の最後に代表生徒が「私は国境なき医師団に入る」と宣言していたと、木村次長は驚きながらもすごくうれしかったと教えてくれた。その高校生たちには会えなかったが、きっと私たちと同様、多くの人に会い多くを学んでいったに違いないと思う。(矢部航一郎)

● ラオスでの食事全般

正直、出国前は心配であったが、ラオスで食べた料理はどれも本当においしいものばかりであった。

まず、カオ・ニャオと呼ばれるうるち米はほとんど毎日食べたように記憶している。円柱状の蓋付きお茶碗(陶器ではなくカゴ) いっぱいに詰められたうるち米を、ラオス人は一口分を左手で取り、右手で握って食べる。黒米のときも赤米のときもあった。どれももちもちしていておいしかった。

麺もよく食べた。カオ・ソーイと呼ばれるもので、レモンをさし、薬物を手でちぎって混ぜながら食べる。見た目と違って辛くなく、あっさりとしていてとても食べやすかった。

変わり種としてはコオロギの揚げ物や蟻の卵を使った料理だ。蟻の卵は噛むとプチプチとした感触が独特だったが、説明されなければそれが何なのかわからない。海外ならではの貴重な経験であった。

研修中はラオス料理だけではなく中華料理やイタリアンなど、いろいろな食事を楽しんだ。そのどれもがおいしく、ガイドのトンワンさんのお蔭だと思う、感謝！(矢部航一郎)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [YBE_0267]

◇キャプション： 夜に寄る

◇解説文：

一緒に旅した仲間、ガイドさん、そして通訳さんには本当に助けられたし、学ばせてもらった！毎日語った！そしてみんな関心の方向性が微妙に違って、これが刺激的で、勉強になった。コープ・チャイ ライライ！



●写真2…ファイル名 [YBE_1546]

◇キャプション： 研修終盤！立ち寄った食堂からの眺め

◇解説文：

ラオスはこれからこの先目覚ましい経済発展を遂げていくと思うが、このきれいな景色、環境、文化、笑顔を大切に守りながら発展していったらと願う。10年後に来たい(期待)！



6. 来年度参加する先生へのアドバイス(持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など)

- ・コンデジ1つで写真も動画もかなり撮ったが、毎晩ちょうど使い切るくらいだった。毎日の充電は欠かせない。よく撮る人は予備バッテリーがあると絶対いい。メモリーカードは容量のかなり大きめのを。カメラと

PC しかコンセントに差し込まない自分にとっては、変圧器はいらない。ラオスの場合、Wifi は研修中どこにいるときも宿で使えた。

- ・食べ物を心配していたが、自分に限って言えば杞憂だった。だが、念のためにウィダーなどを持っていった。
- ・今回「夢」をテーマに出会った人にかいてもらって回ったが、一人にかいてもらう時のスケッチブックと、多人数に一斉に書いてもらう時の画用紙を両方持って行ったが、よかった。
- ・教材に使えそうな物は、かなり意図して最初から収集していった方がいいと思う。
- ・喉をやられている方が多かったので、敏感な方は薬を持っていった方がいいと思う。
- ・ポロシャツは使う。4枚ほど必要。洗濯は連泊時にホテルに頼めば、やってくれる。
- ・事前に経験者によくよく話を聞いておくといい。当然だが、イメージしておくのとそうでないのではかなり違ってくる。

7. その他全般を通じての感想・意見など

今思えば、私がこれまでイメージしてきた国際理解教育は、「異文化理解」だったように思う。それに留まらず、「ともに生きる」とはどういうことだろうというのを、国際協力の具体例を今回の研修で目の当たりにしながら考えることができた。すごく視野の広がる学びができた。しかし、まだまだ学びは続く。そしてさらに、教師として未来ある子どもたちにきちんとした情報を伝えて考えさせていくのが責務である。これから子どもたちと一緒に学ぶのが楽しみだし、深く広くやっていきたい。

そして一緒に研修した仲間には感謝しても感謝しきれない。事前研修で「人の頭を借りて学ぶ」という話があったが、全研修行程でまさにそうであった。ありがとうございました！

そして最後に、引率して下さった JICA 中部の酒井さんと NIED・国際理解教育センターの伴さんはじめ、関わって下さった皆さんには迷惑をたくさんかけたが、いろいろ相談にのっていただき、感謝の気持ちでいっぱい！

以上